

日本語における言語形式の単位：形態音韻論の観点から

黒木 邦彦
神戸松蔭女子學院大學

1 はじめに

本テュートリアルでは、テューターの研究成果のほか、参考文献に挙げる先行研究の成果に基づいて、日本語諸變種の形態音韻論を研究する上で必要となる言語形式の単位を教授する。

「テューターの研究成果」と言ったものゝ、少しグ、れば分かる通り、それに当たるものは実際のところ餘り存在しない。論文などで目にする高齢層方言(個人的かつ具体的には、1950年以前に生まれた人々の地場共通語。以下、単に「方言」)¹を、それらが消滅する前に生で聞いておきたいといふ程度の動機で2010年頃から始めた、日本各地における聞き取り調査の、公に発表してゐない成果に據るところが大きいといふことを初めに斷っておく²。

- (1) 近年の日本語学界に言う「文法(研究)」は、アスペクトやモダリティーといった意味範疇(学界では「文法範疇」とも呼ばれている)の研究が1980年代以降に隆盛したことを承けてか、「特定の意味範疇における類義形式や対義形式の使い分け(を解明すること)」も意味するようである。そのため、文法研究を標榜しながら、形式間の連辞関係・範例関係に無頓着で、意味論に終始している論考も少なくない。(黒木2015:35)

¹ 「[地域名]方言」(e.g. 奈良田方言、伊吹島方言、九州方言、etc.) は多くの場合、高齢層方言を指す。テューターは、音韻と語彙(特に、言語體系を掻き亂す借用語の量)の面から高齢層方言と若中年層方言を區別し、前者を「傳統方言」と呼ぶことも有る。たゞし、この呼稱の妥當性は、「傳統」といふ語の胡散臭さも有って、我ながら不明。

調査にあたっては、「黒木が地域方言(dialect)と稱するものは、個人方言(idiolect)に過ぎない」といふ非生産的批判を避ける爲、これまでに訪れた土地の9割以上で複数名から聞き取りを行なつてゐる。とは言へ、個人差は、辨別するに値しないとテューターが感じたものは盡く看過してをり、かつ、個人差を言語研究上の問題として取り上げたことも無い。ゆゑに、「複数名から」といふ配慮は、今のところ積極的に働いてをらず、批判逃れでしかない。

² 次に挙げる縣では聞き取り調査を実施できてゐない。40縣以上回つてゐると思つてゐたが、さうでもなかった。

(I) 群馬縣 [10]、埼玉縣 [11]、千葉縣 [12]、東京都 [13]、神奈川縣 [14]、石川縣 [17]、岐阜縣 [20]、愛知縣 [23]、滋賀縣 [25]、奈良縣 [29]、岡山縣 [33]、沖繩縣 [47]

- (2) ① 私にとっての理論とは、単純かつ明快に、「現象の一貫した説明モデル」である。
- ② その意味では、言語の特定の現象を対象にした理論だけでなく、1つの言語の体系を、一から一貫して記述してみせること（すなわち、Grammar Writing）もまた立派な理論である。
- ③ 後者の意味での理論は、1つの言語体系がどう成り立っていて、どう変化していくか、をトータルに考えるうえで最強の理論であり、つじつまあわせて個別の現象の理論モデルを修正していくことでは示せない、言語の姿を示すことができるはずである。
- ④ 私は、特定現象に関する理論も、③の意味 [黒木注:「1つの言語の体系を、一から一貫して記述してみせる」といふ意味] での理論もどっちも必要だと考える。しかし、現状、文法体系を記述するということが、③のような理論構築にほかならない、と考える人は少なく、実践する人も少ない。だから、私は③のような考え方を率先して実践する。
- ⑤ フィールドワークから理論を引いたら、ただのピクニックである。

(Facebook、2016年12月05日、下地理則)

2 音韻的単位

2.1 音素

本節では、分節音を音韻的に解釈しながら、音素の設定方法を教授する。その後、音素の弁別的素性を立てる意義を、音素同士の対立関係および類縁関係と絡めながら説く。

2.1.1 文節音の解釈

- (3) 現代共通語におけるハ・パ・ファ行子音の解釈

a. パンと ファンと 班と ハント

[pe↓nto fe↓nto he↓nto he↓nto]

/paNto faNto haNto haNto /

b. 振り 飲みっぷり 知らんぷり 空振り

/huri nomiQpuri siraNpuri karaburi /

[φuɾ^ji nom^jiɾ̄p̄uɾ^ji³ eiɽemp̄uɾ^ji keɽeb̄uɾ^ji]

{Puri nomi+Puri siraN+Puri kara+puri }⁴

³ [nom^jiɾ̄uɾ^ji] でも良いのであるが、音聲、音素、基底を対照させる為、このやうに表記した。

- c. 發 一發 三發 伊丹發
 [hɛ̃tsi: ip̃pɛ̃tsi sɛ̃mpɛ̃tsi itemⁱihɛ̃tsi]
 /hacu iQpacu saNpacu itamihacu /
 {Pacu ic-Pacu saN-Pacu itami-Pacu }
- d. パン 食パン 餡パン 揚げパン
 [pɛ̃N: ɛop̃pɛ̃N⁵ ɛmpɛ̃N ɛgɛpɛ̃N]
 /paN sjoQpaN aNpaN agepaN /
 {pacu sjok-paN aN+paN age+paN }
- e. ハント 各ハント 全ハント 合同ハント
 [hɛ̃nto kɛ̃kɔ̃hɛ̃nto d̃zẽh̃ɛ̃nto go:do:hɛ̃nto]
 /haNto kakuhaNto zenhaNto goodoohaNto /
 {haNto kak-haNto zeN-haNto goo-doo+haNto }

2.1.2 辨別的素性

表 1: 母音の音聲的特徴および辨別的素性

		high	labial	palatal	
		i	+	-	+
		u	+	+	-
		e	-	-	+
		o	-	+	-
		a	-	-	-

	Front	Back
High	i	u
Middle	e	o
Low		a

[palatal] 素性は、母音音素の辨別のみならず、硬口蓋音の辨別と、次に示す、母音 [i] と子音 [ɛ, ç] の類縁性の解釈にあたっても役に立つ。

⁴ {puri}, {nomi}, {siraN} は、厳密に分析すれば、{pur-Ø}, {nom-Ø}, {sir-^aN} と成らう。

⁵ 丁寧に発音すれば、或いは、話者によっては基本的に [ɛokɔ̃pɛ̃N]。

(4) 鹿兒島縣方言における母音 [i] と子音 [e, ɕ] の類縁性

	安い	薄い	涼しい	足	火事	雉
串木野:	[jœ/çkø	ɯsikø	sizie/çkø	œ/ç	k ^w œ/ç	k ⁱ :]
里:	[jesike	ɯsike	siziike	e:ei	kø:zi	未]
瀬上:	[jeike	ɯike	siɲɯike	e:ei	k ^w e:ɲi	k ⁱ : ⁶]
手打:	[jeçkø	ɯsike	sizie/çkø	œi	køzi	未]

また、子音の辨別や自然音類を考慮すると、[round] 素性よりも [labial] 素性を設定する方が、両唇音の辨別と、母音音素 *u* と子音音素 *p*, *b*, *m* の類縁性の解釈 (cf. 表 2) にあたって、経済的である。

2.1.3 自然音類

(5) 現代共通語における高舌母音の無聲化

kisi ⁰	kusi ⁰	sika ⁰	suki ⁰
[k ⁱ çi	k ^ɰ çi	ç:kø	s:k ⁱ]
岸	串/櫛	舌	好き

(6) 瀬上方言における硬口蓋子音交替 (上村 1965; 尾形 1987a; IPA 表記は上村 1965 に據る)

飛ぶ ^ぶ -様	立つ+良 ^い -非過去	書く+易 ^い -非過去 ⁷
{ tob-joo	tat+jø-ka	kak+jasu-ka }
↓	↓	↓
toQ-joo	taQ+jø-ka	kaQ+jai-ka
↓	↓	↓
toQzoo	taQzoka	kaQzaika
[todd̥zø:	tadd̥z̥/d̥zoga	kadd̥z̥aika]

⁶ 規則どほりに行けば、[kⁱ:ɲi] であるが、借用語である爲か、テューターが得た回答は [kⁱ:notoi]。同様の語として、[kⁱse:] (*[kⁱis/œ:ju]) も挙げられる。些末な問題に映るかもしれないが、idiolect と dialect の違ひや言語の資料性を考へる上で、軽視はできない。

⁷ 用語: 文法的意味 (= 生産性に富む形式が表し、かつ、數語で説明するのが難しい意味)

(7) 口之津方言における硬口蓋子音交替

書く ^既 然 ^や る ^過 去	上げ ^る 既 ^然 ^や る ^過 去	取 ^る 既 ^然 ^や る ^過 去	見 ^る 既 ^然 ^や る ^過 去
{ kak-tI#jar-ta	age-tI#jar-ta	tor-tI#jar-ta	mi-tI#jar-ta }
↓	↓	↓	↓
kai-tI#jaQ-ta	age-tI#jaQ-ta	toQ-tI#jaQ-ta	mi-tI#jaQ-ta
↓	↓	↓	↓
kja-tI#jaQ-ta	↓	↓	↓
↓	↓	↓	↓
kja-ti#jaQ-ta	age-ti#jaQ-ta	toQ-te#jaQ-ta	mi-te#jaQ-ta
↓	↓	↓	↓
kja-Q#jaQ-ta	age-Q#jaQ-ta	↓	↓
↓	↓	↓	↓
kjaQZjaQta	ageQZjaQta	toQtaQta	mitaQta
[k ^h et̚dzet̚ɐ	eget̚dzet̚ɐ	tot̚ɐt̚ɐ	m ^h it̚ɐt̚ɐ]

表 2: テ形連聲に見る自然音類

	n	um, ub	m, b	p	r, t	s	k	g
東 A	N [-str] -[-lab, +high] [+nas]		Q [-str] -[-lab, +high] [-nas]			si [+str]	i [-str] [-lab, +high]	
東 B	N [-str] [+nas]		Q [-str] [-nas] -[-lab, +high]			si [+str]	i [-str] [-nas] [-lab, +high]	N [-str] [+nas]
西 A	N [-lab, -high] [+nas]	u [+lab, +high]		Q [-lab, -high] [-nas]			i [-lab, +high]	
西 B	N [-str] -[-lab, +high] [+nas]		u [-str] -[-lab, +high] [-nas] [+lab]		Q [-str] -[-lab, +high] [-nas] [-lab]	si [+str]	i [-str] [-lab, +high]	

2.2 アクセント素

本節では、超分節音を音韻的に解釈しながら、アクセント素の設定方法を教授する。

(8) 串木野方言の語聲調

- a. **a**↓ .geN ‘上げない’
 a .↑**ge**↓ .ta ‘上げた’
 a .ge .↑**da**↓ .saN ‘上げれない (< 上げ出さん)’
 (cf. da .↑**sa**N ‘出さない’)
- b. .**toi**↓ .ga ‘鳥が’
 toi .↑**si**↓ .ka ‘鳥しか’
 toi .↑**pa**↓ .da ‘鳥肌’
 (cf. pa .↑**da** ‘肌’)
- c. ke .↑**ta** ‘書いた’
 kaQ .kjaQ .↑**ta** ‘書きなされた’
 kaQ .kja .ge .↑**ta** ‘書き上げた’
 (cf. a .↑**ge**↓ .ta ‘上げた’)
- d. ni .↑**wa** ‘庭’
 ni .wa .ka .↑**ra** ‘庭から’
 ni .wa .↑**toi** ‘鶏’
 (cf. **toi**↓ .ga ‘鳥が’)

(9) 串木野方言における複雑語ピッチの實現過程

上げる ^る -完了-非過去 { [A]age-[A]cjo <u>r</u> -u } ↓ [A]age-[A]cjo <u>r</u> -u ↓ [A]age-[A]cjoQ [a]ge↑teo?	書く ^く -完了-非過去 [B]kak-[A]cjo <u>r</u> -u ↓ [B]kai-[A]cjo <u>r</u> -u ↓ [B]ke-[A]cjoQ ke↓teo?	重-體=動詞化-3-非過去=引用. 言 ^ふ -非過去=理由 [A]zjuu-tai=[B]zjar-jar-u=[A]cuw-u=de } ↓ [A]zjuu-tai=[B]zjai-jar-u=[A]cu=de ↓ [A]zjuutai=[B]zjaijaQ=[A]cude [̂dzu:↓teiz̄eɪ↑j̄eɪts̄i↓de]
--	---	--

2.3 モーラと音節

モーラと音節を區別する意義を音素配列とアクセントの両面から説く兩者を。

(10) 現代共通語におけるモーラおよび音節の構造

$$\mu = (C)V \text{ or } M \quad \sigma = (C)(S)V(V)(M)$$

(11) 現代共通語における多音節外來語・無意味語のアクセント

- a. ゲ.↑ブ.レ.シ.ラ↓ .シ.エ b. ゲ.↑ブ.レ.シ↓ .ラ.シ,ン
ゲ.↑ブ.レ.シ.ラ↓,一.シ.エ ゲ.↑ブ.レ.シ↓,一.ラ.シ,ン
ゲ.↑ブ.レ.シ.ラ↓,ン.シ.エ ゲ.↑ブ.レ.シ↓,ン.ラ.シ,ン
ゲ.↑ブ.レ.シ.ラ↓,ッ.シ.エ ゲ.↑ブ.レ.シ↓,ッ.ラ.シ,ン
- c. ゲ.↑ブ.レ.シ .ラ↓,ン.シ,ン or ゲ.↑ブ.レ.シ↓ .ラ,ン.シ,ン
ゲ.↑ブ.レ.シ,一.ラ↓,ン.シ,ン or ゲ.↑ブ.レ.シ↓,一.ラ,ン.シ,ン
ゲ.↑ブ.レ.シ,ン.ラ↓,ン.シ,ン or ゲ.↑ブ.レ.シ↓,ン.ラ,ン.シ,ン
ゲ.↑ブ.レ.シ,ッ.ラ↓,ン.シ,ン or ゲ.↑ブ.レ.シ↓,ッ.ラ,ン.シ,ン

3 形態的単位

3.1 「単語」と形態素

「単語」の種類と形態素のそれを紹介したのち、両者の共通点・相違点を分析原理の面から教授する。

「国語学」という研究分野に対する理解は、最近、かなり曖昧になってきてきているようである。「国語学」は国文学的研究の主要な分析法の一つとして発展してきたものであることを確認しておきたい。

古典作品を理解するために、一つ一つの単語の意味や表現の意味を明らかにする必要がある。用例を調べ、どのような文脈で使用されているか、また、同時代の他の文献での使用法を調査して、その意味を確定した上で、文章の意味を理解する。活用形式からその意味の変化を探ったり、語構成から意味を確かめたりもする。これらは「国語学的方法」と呼ばれることもあるが、通常の国文学の読解法の一つである。これは「注釈」のための作業と共通している。つまり、国語学は、古典その当時の意味で理解するための、基本的な手続の総称なのである。

ただ、国語学では、その作品の日本語はどういう位相のものであったのか、その時代の文法の体系はどのようなものであったのか、利用した古辞書がどのような性格であったのかなど、国文学的研究では手が回らない面も研究対象とする。それに、国文学では文学性に乏しい資料は扱わないが、国語学では、漢文の読みを記録した訓点資料、古文書、碑文、さらには落書きなどの非文学的な資料も研究対象とする。そのため、研究対象は非常に広範囲のものになる。そういう対象の広狭や研究の方向の違いはあるが、あくまで、国語学は、国文学研究とのつながりの中で、はじめてその特徴が出てくるのである。

言語の研究をするという点から、国語学には言語学との共通点があるが、古典籍そのものを分析し、それを言語・文学・思想などの研究資料とするという点で、むしろ各国の文献学の方が近いだろう。日本ではそれが国学の流れのもと、「国語学」という研究分野として総合されていたのである。そのような総合された国語学を、言語学の一部であると誤解し、国文学から分離させる傾向が強くなっている。日本学術振興会の分野分類でも、「国語学」は消えてしまい、その研究分野は、言語学の下位におとしめられ、国文学とのつながりが断たれてしまっている。「国語学国文学科」という講座単位が少しずつ減っていることも国語学に対する誤解を助長しているであろう。国文学と繋がっていた根っこが切られてしまえば、国文学から得ていた栄養分が補充されなくなり、枝も幹もやせ細ってゆく。国文学とのつながりが弱まり、国語学的資料とされていた辞書や訓点資料、抄物しょうぶつなどの文献学的、あるいは書誌学的研究ができる研究者も激減している。このような資料を扱うためには「国語学的」な、また「国文学的」な知識と訓練が必要なのである。日本人は自国の文化には冷たく、今もなお欧米の枠組みに従うことを学問的と捉える傾向がある。せっかく総合的な分野として発達した「国語学」を解体し、言語学の下位分類に散在させてしまったことなどもその表れであろう。自国語を外国語と同列に扱う国に、どんな未来が待っているのだろうか。

引用 1: 木田 (2013: i-ii)

印歐諸語の inflection を「活用」と譯するのであれば⁸、清瀬 (1971; 2013) のとほり、日本語の動詞類 (= 動詞、繫辭動詞、形容詞) は活用しないと行って良い。しかし、國語學者・日本語學者の多くはさうした研究成果を無視し、21 世紀に入っても、語構成要素の分析原理を本居春庭のそれから進めようとしない (cf. 黒木 2015)。

⁸ 屋名池誠は、動詞類における接尾辭添加の際に連結音が生じる部分を「活用部」と呼ぶ (cf. 屋名池 1987a)。

★3
此處一韻の活中二韻の活下二韻の活ハ、
此處四韻の活中二韻の活下二韻の活ハ、

★2
テニラハ
テニラハ
テニラハ
テニラハ
テニラハ
テニラハ

活の段二下	活の
亂枯消誉辨兼捨瘦受得	牽舊老
(意)(意)(先)(先)(へ)(弱)(て)(せ)(け)(先)	(か)(り)(い)
人ぬいでぞ	人
ほろけて	ほ
きききき?	き
(う)(ふ)(つ)(く)(う)(う)(ふ)(つ)(く)(う)	(う)(ふ)(つ)(く)(う)
ききききき	き
(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)	(き)(き)(き)(き)(き)
きききき	き
(か)(か)(か)(か)(か)(か)(か)(か)(か)(か)	(か)(か)(か)(か)
ききき	き

これは たせこひ ★1

段二中	活の段一	活の段四
試戀落起	居見于似着射	鉤住逢打押飽
(み)(ひ)(ち)(き)	(か)(み)(ひ)(か)(き)(い)	(ら)(ま)(は)(た)(き)(か)
ぬいでぞ	人ぬいでぞ	人ぬいでぞ り(み)(ひ)(ち)(き)
ほけて	ほろけて	ほろけて
きき?	きききき?	きききき?
(か)(ふ)(つ)(く)	(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)	(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)
ききき	ききききき	ききききき
(き)(き)(き)(き)	(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)	(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)(き)
かきか	かきかか	かきかか
(か)(か)(か)(か)	(か)(か)(か)(か)(か)(か)(か)(か)(か)(か)	(か)(か)(か)(か)(か)(か)(か)(か)(か)(か)
き	き	き

○四種の活の圖 并變らるてたす
★4
此處四韻の活中二韻の活下二韻の活ハ、
此處四韻の活中二韻の活下二韻の活ハ、

引用 2: 本居春庭「四種の活の圖」

	A型		B型		A B型				
	四段	ラ変	上一段	下一段	上二段	下二段	ナ変	カ変	サ変
	書く	あり	見る	蹴る	起く	受く	死ぬ	来(く)	為(す)
語幹	kak	ar	mi	ke	ok	uk	sin	k	s
未然形	kak-a	ar-a	mi	ke	ok-i	uk-e	sin-a	k-o	s-e
連用形	kak-i	ar-i	mi	ke	ok-i	uk-e	sin-i	k-i	s-i
終止形	kak-u	ar-i	mi-ru	ke-ru	ok-u	uk-u	sin-u	k-u	s-u
連体形	kak-u	ar-u	mi-ru	ke-ru	ok-uru	uk-uru	sin-uru	k-uru	s-uru
已然形	kak-e	ar-e	mi-re	ke-re	ok-ure	uk-ure	sin-ure	k-ure	s-ure
命令形	kak-e	ar-e	mi(-yo)	ke(-yo)	ok-i(yo)	uk-e(yo)	sin-e	k-o	s-e(yo)

※奈良時代、「蹴る」は下二段活用であった可能性が高い（「蹴蹴 クエハララカス」〈神代紀〉、「鞠打 まりクウル」〈岩崎本皇極紀〉）。

	A型	B型	A B型 I	A B型 II
	書く、ある、死ぬ	見る、起きる、受ける	来る	する
未然形 1	-a	φ	-o	-a, -i
未然形 2	-o	φ	-o	-i
連用形 1	-i	φ	-i	-i
連用形 2	-*	φ	-i	-i
終止連体形	-u	-ru	-uru	-uru
仮定形	-e	-re	-ure	-ure
命令形	-e	-ro	-oi	-iro

※未然形 2 は意志形、未然形 1 はそれ以外。連用形 2 はテ・タに続く形、連用形 1 はそれ以外を示す。*は音便形、φは語尾を必要としないことを示す。また、A型とそれ以外における、受身・使役の「レルーラレル」「セルーサセル」、意志の「ウーヨウ」の対立は助動詞における異形態の現れと見て、活用表には反映させない。

引用 3: 青木 (2013: 142-43)

國語學・日本語學において、動詞類の活用は盛んに議論されてゐるが、日本語の特徴

のひとつたる派生とその生産力の高さは矮小化されてをり、次のやうに語類を換へる過程のみが派生とされる。

(12) 現代共通語における語類變換派生

- a. *tabe*_[V]-ru ‘食べる’ → *tabe-ta*_[A]-i ‘食べる_{願望}-非過去’
- b. *kata*_[A]-i ‘硬い_{非過去}’ → *kata-sa*_[N]=o ‘硬い_{名詞化}-對格’
- c. *haru*_[N]=o ‘春_{對格}’ → *haru-mek*_[V]-u ‘春_{めく}-非過去’
- d. *zjoosiki*_[N]=no ‘常識_{屬格}’⁹ → *hi-zjoosiki*_[AN]=na ‘非常識_{動詞化}-連體’

3.2 拘束形態素と「附属語」「附属形式」

拘束形態素と、服部 (1950) が提案する「附属語」「附属形式」の関係を自立性とアクセントの両面から示す。

語類を換へる過程のみを派生と見做すにしても、いはゆるカリ活用形容詞からは接尾語「かり」が抽出できるやうに映るが、何故か形容詞の一形態とされてゐる。國文法を離れて、音素単位の分析や、服部 (1950) に言ふ「附属語/附属形式」の別を採用する、大木 (2010) もこの見方を踏襲してをり、{-ker'-} ‘回想’ や {-^ube^-} ‘妥當’¹⁰ といった動詞派生接尾辭を、動詞にもカリ活用形容詞にも接尾する附属語 (enclitic) とする。

」

(13) 中古和文語の動詞類の分析

- | | | | | | |
|-----|--------------------------|------------------------|-------------------------------------|--|---|
| a. | 書 _く -回想 | 上げ _る -回想 | 見 _る -回想 | 無 _い -動詞化 _{回想} | 美 _{しい} -動詞化 _{回想} |
| 黒木: | {kak-ker'-} | age-ker'- | mi _r -ker'- | na [^] -kar'-ker'- | utukusi [^] -kar'-ker'- } |
| | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| | kakiker- | ageker- | miker- | nakariker- | utukusi-kar-iker- |
| 大木: | kak-i=ker- | ag-e=ker- | mi=ker- | na-kari=ker- | utuku-sikari-ker- |
| b. | 書 _く -妥當 | 上げ _る -妥當 | 見 _る -妥當 | 無 _い -動詞化 _{妥當} | 美 _{しい} -動詞化 _{妥當} |
| 黒木: | {kak- ^u be^-} | age- ^u be^- | mi _r - ^u be^- | na [^] -kar'- ^u be^- | utukusi [^] -kar'- ^u be^- } |
| | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| | kakube- | agube- | mirube- | nakarube- | utukusikarube- |
| 大木: | kak-u=be- | ag-u=be- | mi-ru=be- | na-karu=be- | utuku-sikaru=be- |

⁹ 用語: 多義性を有する文法的意味

¹⁰ {r'-}: ラ變動詞語幹 {^-}: 形容詞語幹

(14) 現代共通語の動詞構成要素 (cf. 屋名池 1987b)

a. 語アクセントを變へるもの

派生: $^{-[B]mas-}$ ‘丁寧’, $^{-[B]ta^{\wedge}-}$ ‘願望’文法: $^{-[B]joo}$ ‘意志’

b. 語アクセントを變へないもの

派生: $^{-are-}$ ‘所動’, $^{-sase-}$ ‘使役’, $^{-te-}$ ‘繼續’, $^{-ana^{\wedge}-}$ ‘否定’文法: $^{-joo}$ 以外

3.3 形態素内のモーラ境界と音節境界

モーラ境界と音節境界を形態素に登録する利點を、連聲の分析と絡めながら説く。

丹羽 (2000) に據れば、布施田方言 (三重県志摩町) の w 語幹動詞が連声部分の母音を伸ばすか否かは、次のやうに、語幹が 2 拍以上 (厳密には 2 音節以上か) を有するか否かで決まる。

(15) 布施田方言の w 語幹動詞 -ta 形 (= {-ta} ‘過去’ で終はる形態)

1 拍: <買う> コータ <食う> クータ <酔う> ヨータ

2 拍以上: <笑う> ワロタ <震う> フルタ <思う> オモタ (丹羽 2000: 42)

(16) 布施田方言における w 語幹動詞 -ta 形の形成過程

a.

単音節 w 語幹

買_ふ 食_ふ 酔_ふ{ ka,w -.ta ku,w -.ta jow -.ta

↓ w → u / _-t

 ka,u .ta ku,u .ta jo,u .ta

↓ 母音融合

 ko,\emptyset .ta ku,\emptyset .ta jo,\emptyset .ta

↓ 代償延長

 ko,o .ta ku,u .ta jo,o .ta

b.

複音節 w 語幹

笑_ふ 拂_ふ 思_ふ $wa.raw$ -.ta $Pu.ruw$ -.ta $o.mow$ -.ta }

↓ w → u / _-t

 $wa.rau$.ta $Pu.ruu$.ta $o.mou$.ta

↓ 母音融合

 $wa.ro$.ta $hu.ru$.ta $o.mo$.ta

単音節 w 語幹動詞は、母音融合後に語幹末子音の位置に生じる 1 モーラ分の空きを埋める爲、代償延長 $V_i, _ \rightarrow V_i, V_i$ を行なふ。一方、複音節 w 語幹動詞は母音融合後にさうした空きを作らないので、代償延長を行なはずに済む (0a) と (0b) を比較されたい。

甕島方言の w 語幹動詞は、母音融合を起こすと、代償延長も必ず行なふ。これは、次

のとほり、語幹末子音とその直前の母音の間にモーラ境界を有するからである。

(17) 甌島方言における w 語幹動詞 -ta 形の形成過程

言 _ふ	笑 _ふ	拂 _ふ	會 _ふ	買 _ふ	貰 _ふ	
{ ju,w -ta	wa. ru,w -ta	ha. ru,w -ta	a,w -ta	ka,w -ta	mo. ra,w -ta	}
↓ w → u / _.						
ju,u .ta	wa. ru,u .ta	ha. ru,u .ta	a,u .ta	ka,u .ta	mo. ra,u .ta	
↓ 母音融合						
ju,∅ .ta	wa. ru,∅ .ta	ha. ru,∅ .ta	o,∅ .ta	ko,∅ .ta	mo. ro,∅ .ta	
↓ 代償延長						
ju,u .ta	wa. ru,u .ta	ha. ru,u .ta	o,o .ta	ko,o .ta	mo. ro,o .ta	

次掲 0b) の kute, kuta は、一見すると、母音融合後の代償延長を例外的に行なっていないやうに映るが、kaN, keba を踏まえるに、例外ではなからう。

(18) ‘食_ふ’を意味する甌島方言の w 語幹動詞

a.			b.			
非過去	不完成	目的	條件	否定	毅然	過去
{ ku,w - ^r u	ku, w +wo,r-	ku, w -∅=gai	kw-e.ba	kw- ^a ,n-	kw-te	kw-ta }
↓ ^c → C / V_ ^v → V / C_						
ku,wu	ku, w .wo,r-	ku, w .gai	kwe.ba	kwa,n-	kw.te	kw.ta
↓ w → u / _.						
ku,u	ku, u .wo,r-	ku, u .gai	k(w)e.ba	k(w)a,n-	ku.te	ku.ta

甌島方言において‘食_ふ’を意味する動詞からは、形態的條件に基づいて音形を變へる {k_u,w-} (= {kw- ~ ku,w-}; subscript は特定の形態的條件において現れる音声) という語幹が抽出できる¹¹。次に示すとほり、この分析に據れば、kute, kuta の ku は、(19a) {kuw-} が語幹末子音を u に交替させたのち、母音融合を起こしたもの ({kuw-} → kuu- → ku-) ではなく、(19b) {kw-} が語幹末子音を u に交替させただけのもの ({kw-} → ku-) ということに成る。

¹¹ (18b) に擧げた 4 形式の代わりに kuute, kuuta, kuweba, kuwan- を使う話者 (相對的に若い話者か) は、{k_u,w-} の異形態 {kw-} を捨て、{kuw-} に一本化させつゝある/させたのだらう。

(19) w 語幹動詞テ形の分析

a.	b.
{ kuw -.te kuw -.ta	kw -.te kw -.ta }
↓ w → u / _.	↓ w → u / _.
kuu .te kuu .ta	ku .te ku .ta
↓ 母音融合	
ku .te	ku .ta

先ほど、「甌島方言の w 語幹動詞は、母音融合を起こすと、代償延長も必ず行はう」と条件付けたのは、{kw-} の連聲を考慮してのことである。母音を缺く {kw-} は母音融合を起こさないもので、代償延長は行なはなはしないものゝ、規則から外れてはゐない。

参考文献

- 青木 博文 (2013) 「第五章 文法史」、木田 章義 (2013) (編) 『国語史を学ぶ人のために』、pp. 141-83、世界思想社
- 大木 一夫 (2010) 『古代日本語連体形の機能とその変遷——係り結び文・連体形終止文を視座として——』(日本學術振興會科學研究費補助金研究成果報告書、基盤研究 (C)、課題番號: 19520383)、東北大學文學研究科
- 尾形 佳助 (1987a) 「上甌島瀬上方言の形態音韻論」、九州大學大学院人文科學府・昭和 62 年度修士論文、未公開
- 尾形 佳助 (1987b) 「上甌瀬上方言の子音体系」、『九州大学言語学研究室報告』8、九州大學文學部
- 尾形 佳助 (1988a) 「上甌瀬上方言の人称代名詞」、『九州大学言語学研究室報告』9、九州大學文學部
- 尾形 佳助 (1988b) 「上甌瀬上方言の音韻の記述」、『日本方言研究会 第 46 回研究発表会 発表原稿集 (於國學院大學)』、pp. 46-54、日本方言研究会
- 上村 孝二 (1965) 「上甌島瀬上方言の研究」、『鹿児島大学法文学部紀要文学科論集』1、pp. 21-49、鹿児島大學法文學部
- 上村 孝二 (1971) 「甌島の方言」、『国語国文薩摩路』15、鹿児島大學文理學部國文研究室 (再録: 井上 史雄・篠崎 晃一・小林 隆・大西 拓一郎 (編) 『日本列島方言叢書 27 九州方言考 5 (鹿児島県)』、pp. 44-59、ゆまに書房)
- 小林 泰秀 (1983) 「津軽方言の音韻規則」、『広島女学院大学論集』33、pp. 113-33、広島女學院大學
- 木田 章義 (2013) (編) 『国語史を学ぶ人のために』、世界思想社
- 清瀬 義三郎 則府 (1971) 「連結子音と連結母音と——日本語動詞無活用論——」、『國語學』86、pp. 42-56、国語學會
- 清瀬 義三郎 則府 (2013) 『日本語文法体系新論』、ひつじ書房
- 黒木 邦彦 (2015) 「清瀬義三郎則府『日本語文法体系新論——派生文法の原理と動詞体系の歴史——』、『日本語の研究』11-4、pp. 35-42、日本語學會
- 新田 哲夫 (2007) 「日本語諸方言に見られる形容詞語幹の長母音」、『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』27、pp. 37-84、金沢大學文學部
- 丹羽 一彌 (2000) 「三重県志摩町布施田方言の音便形とバ四・マ四動詞」、『人文科学論集』、pp. 41-49、信州大學
- 服部 四郎 (1950) 「附属語と附属形式」、『言語研究』15、pp. 1-26、日本言語學會 [再録: 服部四郎 (1960)

- 『言語学の方法』、pp. 461-91、岩波書店]
- 早田 輝洋 (1985) 『博多方言のアクセント・形態論』、九州大學出版會
- 南 不二男 (1966) 「長崎県口之津方言の形態音韻論」、『言語研究』49、pp. 11-27、日本言語學會
- 南 不二男(1967) 「鹿児島県甕島瀬上方言の音韻体系」、『方言研究年報』10、pp. 1-17、広島大學方言研究會
- 森 勇太・平塚 雄亮・黒木 邦彦 (編) (2015) 『甕島里方言記述文法書』(人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」研究成果報告書)、國立國語研究所
- 屋名池 誠 (1986) 「述部構造——現代東京方言述部の形態=構文論的記述——」、『松村明教授古稀記念國語研究論集』、pp. 583-601、明治書院
- 屋名池 誠 (1987a) 「活用——現代東京方言述部の形態=構文論的記述〔2〕——」、『学苑』565、pp. 194-208 (左開き)、昭和女子大學
- 屋名池 誠 (1987b) 「述部のアクセント——現代東京方言述部の形態=構文論的記述〔3〕——」、『学苑』573、pp. 91-106 (左開き)、昭和女子大學
- 屋名池 誠 (1988a) 「語——現代東京方言述部の形態=構文論的記述〔4〕——」、『学苑』577、pp. 199-209 (左開き)、昭和女子大學
- 屋名池 誠 (1988b) 「述部のアクセント・第2——現代日本語諸方言による記述方法の検証と拡大——」、『学苑』578、pp. 97-110 (左開き)、昭和女子大學
- 屋名池 誠 (1988c) 「活用・再論——現代東京方言述部の形態=構文論的記述〔2〕・補遺——」、『学苑』579、pp. 79-91 (左開き)、昭和女子大學